

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 8 月 20 日

所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	沓間 領

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
マレーシア サバ州 セピロック及びキナバタンガン川
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
熱帯雨林のフィールド見学及び野生ワニの観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 29 日 ~ 平成 26 年 8 月 9 日 (12 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
サバ大学 熱帯生物学研究所 アブドゥル・ハミド博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<p>今回の渡航の目的は熱帯雨林地域のフィールドワークの基礎を学ぶ事である。そのため WRC 博士課程学生の松川さんに同行し、研究の補助及びフィールドの見学を行った。またラジオテレメトリーを始めとした研究の基本を学んだ</p> <p>各日の日程</p> <p>7/29 WRC から関西国際空港へ。香港を経由しマレーシア、サバ州コタキナバル空港に 18:00 頃到着。夕食を取りホテルで就寝。</p> <p>7/30 松川さんの調査道具受け取りに同行。身の回り品(現地携帯)などを揃えるために買い物。松島と動物園、及びマングローブ保全林を見学。同じホテルで就寝</p> <p>7/31 朝発の国内線でサンダカンに向かう。ホームステイ先の CHU SAU LAN さん宅にご挨拶。</p> <p>8/1 午前中に松川さんのテレメトリーを借りて基本的な操作方法を学ぶ。松島と2人で発信機を隠して見つけ出すなどして練習した。午後からは松川さんのフィールドに入り、熱帯雨林の歩き方、カメラトラップの設置、テレメトリーの練習などを行う。ヒルがとてもとくさんいた。</p> <p>8/2 午前中は松川さんが今回持ってきたコーン式貫入試験器の取り扱い練習。午後から1人でスカウ行きのバスに乗り、キナバタンガン川でのリバークルーズにてワニを観察するために移動。宿にチェックインした後、先ず夕方ツアーに参加し熱帯雨林を流れる河川及びそこに棲む動物の見学。カニクイザルを始めとして多くの動物を見る事ができた。夕食後にナイトツアーに参加し、子ワニ(イリエワニ)を発見した。その他にもヘビ、フクロウ等を見る事ができた。</p> <p>8/3 朝6時からのツアーに参加。比較的大型のワニ(4~5m)が陸地で休んでいるのを発見。セピロックに帰った後、RDC(Rainforest discovery center)のトレイルを一人で散策。</p> <p>8/4 オランウータンセンター、RDCの見学。トレイルを歩く。</p> <p>8/5, 8/6 松川さんの調査手伝い</p>

8/7 サンダカンのクロコダイルフาร์มの見学

8/8 サンダカン空港から飛行機でコタキナバルに移動。サバ大学熱帯生物学研究所 アブドゥル・ハミド博士と面談。

8/9 コタキナバル空港より香港経由で日本に帰国

詳細

テレメトリー：調査前の準備、基本的な使い方などを先に学んで実際に森林の中でヤマアラシを追跡した。森の中は起伏があって遮蔽物が多いので単純に電波の強いほうへ歩くのではなく、地形なお色々なことを念頭において追跡しなければならないと学んだ。最後の調査では巣穴に隠れたヤマアラシを発見することができ、大変良い経験になった。

熱帯雨林：熱帯雨林内を歩くのは初めての経験であったが、聞いていた通りの高温多湿で汗が多量に出るため、水分をきっちりとらねばならないと思った。また、当たり前であるが日本の森林とは植生や動物相がかなり異なり、それを自分の目で見られた事は大きな経験になった。

リバークルーズ：ツアーに参加して朝夕晩の3回参加した。キナバタンガン川にはイリエワニが生息しており2回（死体を含めると3回）見る事ができた。1匹は幼体、1匹は成であった。場所にもよるが、川岸ぎりぎりまでみっちり植物が生えており、陸側からの歩きの調査は大変だと感じた。

ハミドさんとの面談

サバ大学熱帯生物学研究所のアブドゥル・ハミド博士とミーティングを行い、自分の研究計画についてお話をさせて頂いた。自分の研究計画についてのアドバイスを頂いた。英語でしっかり自分の考えを述べる事ができたのでとても有意義な経験だった。

全体を通しての感想

初の海外調査渡航で分からない事も多々あったが先輩と一緒に渡航したおかげで大きなトラブル無く無事帰って来られた。この渡航で一番強く実感したのは、調査地の人々との関係であった。無論私たちの調査は現地の人々の協力が不可欠であり、独りよがりな研究ではうまくいかないと強く感じた。また現地の人との交流はとても楽しい物であり、語学の向上にもとても良いものであると思った。これらの事は話の上では知っていたが、実際に自分で海外に渡航して実感できた事は自分の中の大きな財産になった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



イリエワニ（リバークルーズにて）



RDC 内のトレイル



クロコダイルファームにて



オランウータン



リバークルーズ（朝）の様子



テングザル（リバークルーズにて）

6. その他（特記事項など）